2013年度
第1問

前半は「〜するな、〜してはダメ」(なんでだよ…)という形式のdis.り構文。
後半はex2、ex3を契機に「じゃあどうすべき」が述べられ回回回回回のコ系指示語でスピード展開、スピード解決

論拠ばかり増えて打開策が見えないのがストレスがかかる。

(ただし、回は"もしかしたら可能性の飛躍した話"なのに注意)

第一問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

1 詩人―作家が言おうとすること、いやむしろ正確に言えば、その書かれた文学作品が言おう、言い表そうと志向することは、それを告げる言い方、表し方、志向する仕方と切り離してはありえない。人々はよく、ある詩人―作家の作品は「しかじかの主張をしている」、「こういうメッセージを伝えている」、「彼の意見、考え、感情、思想はこうである」、と言うことがある。筆者も、ときに(長くならないよう、短縮し、簡潔に省略するためにせよ)それに近い言い方をしてしまう場合がある。しかし実のところ、ある詩人―作家の書いた文学作品が告げようとしているなにかとりあえず内容・概念的なものとみなされるなにか、言いかえると、その思想、考え、意見、感情などと思われているなにかは、それだけで切り離され、独立して自存していることはないのである。(意味され、志向されている内容は、それを(意味する仕方、志向する仕方)の側面、表現形態の面、意味するかたちの側面と一体化して作用することによってしか存在しないし、コミュニケートされない。だから(意味されている内容・概念・イデー)のみを抜き出して「これこそ詩人―作家の思想であり、告げられたメッセージである」ということはできないのだ。

2 それゆえまた、詩人―作家のテクストを翻訳する者は、次のような姿勢を避けるべきだろう。つまり翻訳者が、むろん原文テクストの読解のために、いったんそのテクストの語り方の側面、意味するかたちの側面を経由して読み取るのは当然なのであるが、しかしこのフォルム的側面はすぐに読み終えられ、通過されて、もうこの(意味するかたちの側面)を気づかうことをやめるという姿勢は取るべきでない。もっぱら自分が抜き出し、読み取ったと信じる意味内容・概念の側面に注意を集中してしまうという態度を取ってはならない。そうやって自分が読み取った意味内容、つまり(私)へと伝達され、(私)によって了解された概念的中身・内容が、それだけで独立して、まさにこのテクストの言おう、語ろうとしていることをなす(このテクストの志向であり、意味で

ある)とみなしてはならないのである。

3 翻訳者は、このようにして自分が読み取り、了解した概念的中身・内容が、それだけで独立して(もうそのフォルム的側面とは無関係に)、このテクストの告げる意味であり、志向であるとみなしてはならず、また、そういう意味や志向を自分の母語によって読みやすく言い換えればよいと考えてはならないだろう。

4 自分が抜き出し、読み取った中身・内容を、自らの母語によって適切に言い換えればシュビよく翻訳できると考え、そう実践することは、しばしば読みやすく、理解しやすい翻訳作品を生み出すことになるかもしれない。ただし、そこには、大きな危うさも内包されているのだ。原文のテクストがその独特な語り口、言い方、表現の仕方によって、きわめて微妙なやり方で告げようとしているなにかを十分に気づかうことから眼をそらせてしまうおそれがあるだろう。

5 少し極端に言えば、たとえばある翻訳者が「これがランボーの詩の日本語訳である」として読者に提示する詩が、ランボーのテクストの翻訳作品であるというよりも、はるかに翻訳者による日本語作品であるということもありえるのだ。

6 それを避けるためには、やはり翻訳者はできる限り原文テクストをチクゴ的にたどること、(字句通りに)翻訳する可能性を追求すべきだろう。原文の(意味する仕方・様式・かたち)の側面、表現形態の面、つまり志向する仕方の面に注意を凝らし、それにあたうかぎり忠実であろうとするのである。

7 その点を踏まえて、もう一度考えてみよう。ランボーが、《Tu voles selon……》(……のままに飛んでいく)と書いたことのうちには、つまりこういう語順、構文、語法として(意味する作用や働き)を行なおうとし、なにかを言い表そうと志向したこと、なにかをコミュニケートしようとしたことのうちには、なにかしら特有な、独特なもの、密かなものが含まれている。翻訳者は、この特有な独特さ、なにか密かなものを絶えず気づかうべきであろう。なぜならそこにはランボーという書き手の(というよりも、そうやって書かれた、このテクストの)独特さ、特異な単独性が込められているからだ。すなわち《通常ひとが(個性)と呼ぶもの、芸術家や文学者の(天分)とみなすもの》が宿っているからである。

8 こうして翻訳者は、相容れない、両立不可能な、とも思える、二つの要請に同時に応えなければならないだろう。その一つは、

原文が意味しようとするもの、言おうとし、志向し、コミュニケートしようとするものをよく読み取り、それをできるだけこなれた、達意の日本語にするという課題・任務であり、もう一つは、そのためにも、原文の〈かたち〉の面、すなわち言葉づかい（その語法、シンタックス、用語法、比喩法など）をあたう限り尊重するという課題・任務である。そういう課題・任務に応えるために、翻訳者は、見たとおり、原文＝原語と母語との関わり方を徹底的に考えていく。翻訳者は、原文の〈意味する仕方・様式・かたち〉の側面、表現形態の面、つまり志向する仕方の面を注意深く読み解き、それを自国語の文脈のなかに取り込もうとする。フランス語における志向する仕方は、日本語における志向する仕方と一致することはほとんどなく、しばしば食い違い、齟齬をきたし、マサツを起こす。それゆえ翻訳者は諸々の食い違う志向する仕方を必死になって和合させ、調和させようと努めるのだ。あるやり方で自国語（自らの母語）の枠組みや規範を破り、変えるところまで進みながら、ハーモニーを生み出そうとするのである。

◇M1(091—6)

こうして翻訳者は、絶えず原語と母語とを対話させることになる。この対話は、おそらく無限に続く対話、終わりなき対話であろう。というのも諸々の食い違う志向の仕方が和合し、調和するということは、来るべきものとして約束されることはあっても、けっして到達されることや実現されることはないからだ。こうした無限の対話のうちに、まさしく翻訳の喜びと苦悩が表裏一体となって存しているだろう。

もしかしたら、翻訳という対話は、ある新しい言葉づかい、新しい文体や書き方へと開かれているかもしれない。だからある意味で原文＝原作に新たな生命を吹き込み、成長をウナガし、生き延びさせるかもしれない。翻訳という試み、原文と（翻訳者の）母語との果てしのない対話は、ことによると新しい言葉の在りようへとつながっているかもしれない。そう約束されているかもしれない。こういう約束の地平こそ、ベンヤミンがシサした翻訳者の使命を継承するものであろう。

そしてこのことは、もっと大きなパースペクティブにおいて見ると、諸々の言語の複数性を引き受けるということ、他者（他なる言語・文化、異なる宗教・社会・慣習・習俗など）を受け止め、よく理解し、相互に認め合っていかねばならないということ、そのためには必然的になんらかの「翻訳」の必然性を受け入れ、その可能性を探り、拡げ、掘り下げていくべきであるということに結ばれているだろう。翻訳は諸々の言語・文化・宗教・慣習の複数性、その違いや差異に細心の注意を払いながら、自らの母語（いわゆる自国の文化・慣習）と他なる者語（異邦の文化・慣習）とを関係させること、対話させ、競い合わせることである。そうだとすれば、翻訳という営為は、諸々の言語・文化の差異のあいだを媒介し、可能なかぎり横断していく営みであると言えるのではないだろうか。

（湯浅博雄「ランボーの詩の翻訳について」）

◇M1(091—7)

〔注〕 ○フォルム――forme（フランス語）、form（英語）に同じ。　○シンタックス――syntax　構文。
○ランボー――Arthur Rimbaud（一八五四～一八九一）フランスの詩人。
○ベンヤミン――Walter Benjamin（一八九二～一九四〇）ドイツの批評家。

設　問

(一)　「もっぱら自分が抜き出し、読み取ったと信じる意味内容」(傍線部ア)とあるが、それはなぜか、説明せよ。

(二)　「はるかに翻訳者による日本語作品である」(傍線部イ)とはどういうことか、説明せよ。

(三)　「原語と母語とを対話させる」(傍線部ウ)とはどういうことか、説明せよ。

(四)　「翻訳という対話は、ある新しい言葉づかい、新しい文体や書き方へと開かれている」(傍線部エ)とあるが、なぜそういえるのか、説明せよ。

(五)　「翻訳という営為は、諸々の言語・文化の差異のあいだを媒介し、可能なかぎり横断していく営みである」(傍線部オ)とあるが、なぜそういえるのか、本文全体の趣旨を踏まえた上で、一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ。

(六)　傍線部a、b、c、d、eのカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

a　シユビ　　b　チクゴ　　c　マサツ　　d　ウナガ(し)　　e　シサ